

## 研究要旨

### 大都市人口減少地域における 都市空間とソーシャルインクルージョン機能の変遷に関する研究

代表 仁科 伸子（熊本学園大学大学院・社会福祉学部 准教授）

委員 保井 美樹（法政大学現代福祉学部 教授）

本稿は、シカゴ市のイングルウッド地区において都市空間の衰勢と社会機能としてのソーシャルインクルージョンの関係性を明らかにしようと試みたものである。イングルウッドはサウスシカゴに立地する。19世紀には鉄道労働者の町として東欧からの移民の町として発展した。63通は、シカゴにおける最大の商業地域のひとつとして発展したが、1960年から1970年ごろのホワイトフライトによって人口が著しく減少していった。本稿に掲載した写真は、この地域が非常に反映していたことを物語っているが、現在では地域には仕事がなく45%の家庭が何らかの公的支援を受給している。

本研究では、人口減少と衰退によって社会から隔絶されてしまった状況を物的、社会的、経済的、文化的側面から分析すると同時に、近年始まっているコミュニティビルディングの実態についても明らかにしていく。本研究では、都市計画的な記録、文書、住民インタビューによって地域の20世紀の歴史を再構築しようと試みた。このプロセスの中で、コミュニティセンターにおいて多くの写真が見つかった。

また、住民やコミュニティで働く人々からの口述により生活者の視点からみた繁栄と衰退の過程を明らかにすると同時に、近年のソーシャルインクルージョンの試みについて言及した。近年のイングルウッド地域の開発は、フィジカルな開発や商業開発のみにとどまらず、民間組織の主導と連携による職業開発や空き地活用などの社会的な開発が大きな役割を担っている。この動きは、緩慢ではあるが確実にイングルウッドの未来を確実に形成している。そして、イングルウッドの経験は、この地域だけにとどまらず同じような人口減少や衰退の問題を抱える他の地域においてのコミュニティ再生に貢献するであろう。